

4. 水害と治水事業の沿革

4-1 既往洪水の概要

那珂川は古くから、流域の人々を潤し豊かな生活の支えとなってきたが、同時に那珂川がもたらした洪水被害も計り知れない。

那珂川の洪水記録で最も古いのは、佐竹氏時代末期の慶長7（1602）年のものである。

(1) 藩政時代の洪水

徳川藩政時代の大洪水としては、享保8（1723）年、天明6（1786）年が知られ、特に天明6年の洪水が最大といわれる。城下の家屋の流出など被害は甚大で、天明3（1783）年の浅間山噴火による凶作に追い打ちをかけるものとなった。

表 4-1 藩政時代の水害

		被 害 状 況
慶長7年	(1602年)	浄光寺門を浸す。
寛文10年10月	(1670年)	領内損耗8万余石。
◎ 享保8年8月	(1723年)	荒神橋・新寺橋欄干の上を高瀬舟が往来する。水戸下町は一面浸水。千波湖増水で1尺5寸（約45cm）の水深。浄光寺口の水深は慶長7年より3尺（約90cm）低かった。俗に卯年の洪水といわれた。
享保11年	(1726年)	（洪水）
享保13年7月	(1728年)	年に8度の洪水が続いた。7月8、9日の洪水は、卯月の洪水より、1尺6、7寸（約50cm）ほど低かった。
享保13年9月	(1728年)	9月2日にまた出水。享保8年に等しい大水。
享保15年9月	(1730年)	8月29日から9月1日にかけて洪水。享保8年よりやや多い。三之丸御殿が破損。那珂川で上流から流れて来る人家が見られた。
享保18年6月	(1733年)	（洪水あり、記録なし）
享保19年6月	(1734年)	那珂川大水、杉山土手崩れる。
寛保2年6月	(1742年)	轟橋石垣崩れる。
宝暦7年4月	(1757年)	（洪水）
宝暦7年5月	(1757年)	享保8年以来の大水。
宝暦7年6月	(1757年)	千波湖溢れる。
宝暦7年8月	(1757年)	千波湖溢れる。
宝暦12年4月	(1762年)	千波湖・那珂川洪水。
宝暦13年4月	(1763年)	（府下洪水）
安永7年	(1778年)	（洪水）
安永8年8月	(1779年)	那珂川氾濫、荒神橋・赤沼附近は軒端に浸水。下町ではほとんど浸水。枝川も全村没水。
安永9年6,7月	(1780年)	（洪水）
天明3年6月	(1783年)	那珂川氾濫、安永8年より2尺（約60cm）ほど高し。
◎ 天明6年7月	(1786年)	16日昼頃那珂川・千波湖が氾濫。崖崩れ、土手崩れ、家屋倒壊発生、杉山河岸半ば水没。那珂川の水位は、享保8年の水より、5尺高く、根本町でも6尺高、枝川で3尺高といわれる。水戸藩米倉浸水し、1万俵以上が被害。下町の水位は、1丈1、2尺（約3.6cm）になった。
天明8年	(1788年)	（洪水）
文化8年	(1811年)	（洪水）
文化9年	(1812年)	（洪水）
文政6年8月	(1823年)	那珂川洪水。
文政7年8月	(1824年)	天明6年以来の大水、一の町まで溢れる。
文政8年	(1825年)	（洪水）
文政12年	(1829年)	（洪水）
天保6年	(1835年)	（洪水）
天保9年	(1838年)	（洪水）
弘化3年	(1846年)	（洪水）
安政5年	(1858年)	（洪水）

注：◎は大洪水と伝えられている洪水。

（出典：建設省関東地方建設局 常陸五十年史）

(2) 明治・大正・昭和初期の洪水

明治・大正時代の大洪水としては、明治 23 (1890) 年、明治 29 (1896) 年、明治 35 (1902) 年、明治 43 (1910) 年が知られ、特に明治 43 年の洪水が最大といわれる。降雨総量は水戸測候所が明治 30 年に開設されて以来という 225.8mm に達し、連日の豪雨で青柳地点の水位は 7.02m を記録、関東地方一帯で破堤、浸水が頻発した。また、昭和 13 年の洪水は水戸市周辺で大規模な洪水被災があった。

表 4-2 明治～昭和初期の水害

年	月	(西 曆)	被 害 状 況
明治 3 年	7 月	(1870 年)	不明。
明治 11 年	8 月	(1878 年)	不明。
明治 18 年	10 月	(1885 年)	那珂川平常水位より 6 尺 (1.8m) 増す。勝田市田畑冠水。
明治 20 年	6 月	(1887 年)	勝倉で平常水位より 1 丈 (3m) あがる。
明治 22 年	9 月	(1889 年)	那珂川平常水位より 1 丈 5 尺 (4.5m) あがる。三反田字上瀬の堤防決壊。
明治 23 年	7~8 月	(1890 年)	那珂川で水位 2 丈余 (約 6m) あがる。川筋は一面溢水。
明治 25 年	9 月	(1892 年)	青柳の水位 7m を越える。
明治 29 年	9 月	(1896 年)	青柳の水位 7.42m。海門橋 (那珂湊)、那珂川橋 (太田街道)、枝川の浜路橋流失。下市一帯、水戸駅まで浸水。
明治 31 年	9 月	(1898 年)	那珂川、千波湖氾濫。
明治 32 年	7 月	(1899 年)	不明。
明治 35 年	9 月	(1902 年)	那珂川水位 6.24m。水戸で全壊 89 戸、半壊 67 戸。農作物の被害甚大。
明治 40 年	7 月	(1907 年)	那珂川、枝川で水位、1 丈 4 尺 (4.2m) となる。
明治 41 年	7 月	(1908 年)	大雨。
明治 41 年	8 月	(1908 年)	那珂川で増水。3 尺 (90cm) ほどあがる。
明治 43 年	8 月	(1910 年)	青柳で水位 7.02m。水戸で床上浸水 416 戸、床下 272 戸。枝川で床上 66 戸、流出家屋 3 戸。
明治 44 年	7 月	(1911 年)	那珂川、千波湖氾濫。
大正 2 年	8 月	(1913 年)	枝川で水位 1 丈 8 尺 (5.4m)。畑作物被害甚大。
大正 3 年	8 月	(1914 年)	那珂川の水位 2 丈 1 尺余 (6.3m)。枝川の床上浸水 70 戸、浸水家屋 100 余戸。大洪水。
大正 6 年	9~10 月	(1917 年)	枝川で水位 1 丈 3 尺余 (約 4m)。川田村で家屋倒壊 49 戸。
大正 9 年	5 月	(1920 年)	那珂川水位 1 丈 5 尺 (4.5m)。(大洪水)
大正 9 年	10 月	(1920 年)	那珂川水位 1 丈 8 尺 (5.4m)。早戸川氾濫。(大洪水)
大正 9 年	12 月	(1920 年)	那珂川の水位 3 尺余 (1m) 増水。
大正 10 年	9 月	(1921 年)	(洪水)
大正 11 年	2 月	(1922 年)	(大洪水)
大正 11 年	4 月	(1922 年)	早戸川堤防決壊。枝川で水位 1 丈 5 尺 (4.5m)。
昭和 3 年	8 月	(1928 年)	(洪水)
昭和 4 年	9 月	(1929 年)	那珂川増水 1 丈 (3m)。農作物被害甚大。
昭和 5 年	8 月	(1930 年)	(洪水)
昭和 7 年	11 月	(1932 年)	(洪水)
昭和 9 年	9 月	(1934 年)	(洪水)
昭和 10 年	9 月	(1935 年)	(洪水)
昭和 13 年	6 月	(1938 年)	6~7 月にかけて、水戸市北部那珂郡柳河、川田、勝田各村の大部分が冠水。水府橋を除く 5 橋 (千歳橋、那珂川大橋、万代橋、関戸橋、海門橋) が流出・沈下崩落。被災人数 17,000 人超。9 月にも洪水被害起こる。

(出典：建設省関東地方建設局 常陸五十年史)

(3) 昭和（戦後）以降の洪水

昭和（戦後）以降の大洪水としては、昭和 22 年（1947）、昭和 33 年（1958）、昭和 36 年（1961）、昭和 41 年（1966）、昭和 61 年（1986）、平成 10 年（1998）があり、近年でも頻繁に生じている。

表 4-3 昭和（戦後）以降の主な洪水（那珂川流域）

洪水発生年	流域平均2日間雨量 (野口上流域)	流量 (野口)	被害状況
昭和22年9月16日 (カスリーン台風)	232mm	(7,620m ³ /s) ※戻し流量	床下浸水 1,000 戸 床上浸水 1,919 戸
昭和33年7月21日 (台風10号)	213mm	3,570m ³ /s	不明
昭和36年6月27日 (台風6号)	207mm	4,340m ³ /s ※戻し流量	床下浸水 49 戸 (栃木県) (茨城県内は不明) 床上浸水 10 戸 (栃木県) (茨城県内は不明)
昭和39年8月23日 (台風14号)	139mm	2,650m ³ /s	浸水家屋被害なし
昭和41年9月25日 (台風26号)	174mm	3,730m ³ /s	不明
昭和47年9月15日 (台風20号)	178mm	2,710m ³ /s	床下浸水 9 戸 (うち栃木県 0 戸) 床上浸水 2 戸 (うち栃木県 0 戸)
昭和61年8月3日 (台風10号)	248mm	6,490m ³ /s ※戻し流量	床下浸水 2,815 戸 (うち栃木県 809 戸) 半壊 85 戸 床上浸水 4,864 戸 (うち栃木県 1,305 戸) 全壊流失 25 戸
平成3年8月20日 (台風12号)	182mm	2,950m ³ /s	床下浸水 542 戸 (うち栃木県 325 戸) 全壊流失 3 戸 床上浸水 196 戸 (うち栃木県 31 戸)
平成10年8月28日 (台風4号) (停滞前線)	330mm	5,930m ³ /s ※戻し流量	床下浸水 400 戸 (茨城県) 床上浸水 411 戸 (茨城県)
平成11年7月13日 (前線豪雨)	186mm	3,960m ³ /s	床下浸水 352 戸 (うち栃木県 284 戸) 半壊 14 戸 床上浸水 51 戸 (うち栃木県 20 戸) 全壊流失 1 戸
平成14年7月9日 (台風6号)	277mm	3,750m ³ /s	床下浸水 26 戸 (うち栃木県 4 戸) 床上浸水 16 戸 (うち栃木県 3 戸)

※ () 書きは推定値、戻し流量は氾濫戻し流量。

※ 被害状況については、S36.6、S39.8、S47.9、S61.8、H10.8、H11.7、H14.7 について「水害統計」、S22.9 は「水戸市水害誌」から記載。

(4) 昭和以降の著名洪水の概況

昭和以降における著名洪水の概況は以下のとおりである。

① 昭和 13 年洪水

6 月末小笠原西方から北上した台風は関東地方一帯に未曾有の豪雨をもたらした。那珂川流域では下流域の雨量が特に多く、水戸測候所では 59 時間で 491.6mm を記録した。

那珂川の水位が 7.55m という前代未聞の出水となり、水戸市近郊の村々の冠水のほか、5 つの橋梁の流出・沈下・崩落などにより鉄道を含む交通機関は途絶し、被災人数 17,000 人を数えた。この年 9 月にも台風による洪水が発生し、那珂川の水位は 8.46m と過去最高を記録した。雨量は多くなかったものの急激な増水により少なからぬ被害をもたらした。



▲昭和 13 年洪水の水戸市街地の様子

(出典：茨城新聞社 写真記録茨城の 20 世紀)

② 昭和 16 年洪水

7 月 10 日から降り始めた雨は月末まで継続的に降り続き、総降雨量は 588.0mm に達した。那珂川は 13 日に最高水位 7.28m を記録していったん減水に転じたが、21～22 日に再び上昇を始め、23 日に渡里村水道浄水場で 10.4m、青柳で 8.23m を記録した。家屋の全壊 20 戸、流失 32 戸、床上浸水 2,478 戸の被害をもたらした。

③ 昭和 22 年洪水

13 日に沖ノ島島付近から北上したカスリーン台風は、房総半島をかすめて三陸沖に抜けたが、台風の接近に伴って寒気団が侵入し各地に降雨をもたらした。12 日から 15 日までの総雨量は水戸で 381.4mm であったが翌 16 日にかけて暴風雨にかわり 3 時間の

降雨量 197.5mm という水戸測候所の過去最大を記録した。那珂川は大出水となり、最高水位は水府橋で 7.80m に達した。負傷者 97 名、全壊 67 戸、床上浸水 1,919 戸、床下浸水 1,000 戸の大災害となった。



▲昭和 22 年 9 月洪水の様子（水郡線鉄橋付近）

(出典：常陸河川国道事務所資料)

④ 昭和 33 年洪水

9月27日に神奈川県に上陸した台風22号は、東京付近を経て下館、大子付近を相次いで通過し、最大風速は水戸で26m/s、筑波山で34m/s、雨量は茨城県南部で300mmを記録した。那珂川の最高水位は、野口で4.14m、水府橋で6.35mに達した。

⑤ 昭和 36 年洪水

6月27日に四国沖で消滅した台風6号により南方の湿った気流が日本上空に進入し、梅雨前線が活発化したため、四国、中国から関東に及ぶ広い範囲に豪雨をもたらした。いったん北上した梅雨前線が南下したことにより、那珂川流域は大雨となり、水戸で362mmを記録した。那珂川の最高水位は、野口で4.68m、水府橋で7.06m、最大流量は野口で4,339m³/sec（計画高水流量5,200m³/sec）であった。

⑥ 昭和 41 年洪水

6月27日台風4号の接近により関東地方全域に多量の降雨があり、水戸では229mmを記録した。那珂川の最高水位は、水府橋で7.10mに達した。

さらに9月には、台風26号が勢力を弱めることなく日本に上陸したため、短時間に降雨が集中した。那珂川の最高水位は、野口で4.90m、水府橋で7.18mを記録した。

⑦ 昭和 61 年洪水

フィリピンの東海上に発生した台風 10 号は、伊豆大島付近の海上で温帯低気圧となったが、8 月 5 日 3 時には銚子の西を通り、9 時には水戸の東海上を通過して三陸沖に進み、栃木県東部から茨城県西部・北部を中心に関東地方全域に強い雨を降らせた。

この台風により那珂川流域では大田原で 313mm、水戸で 186mm の総雨量を記録した。特に 1 時間に 30mm～40mm という集中豪雨なみの降雨を記録したことにより、大出水となった。

那珂川の水府橋地点の水位は、8 月 5 日 16 時 30 分には最高水位 9.15m を記録した。計画高水位 (8.152m) を約 1m も越える未曾有の洪水となった。

那珂川沿川の浸水被害は茨城県、栃木県合わせて床上浸水 4,864 戸、床下浸水 2,815 戸であった。



▲昭和 61 年洪水 那珂川の氾濫 (水戸市)
(出典：関東建設弘済会 昭和 61 年 8 月洪水 水害)



▲洪水によって流された家屋 (那須烏山市)



▲水没した水戸市街地の様子

(出典：関東建設弘済会 昭和 61 年 8 月洪水)

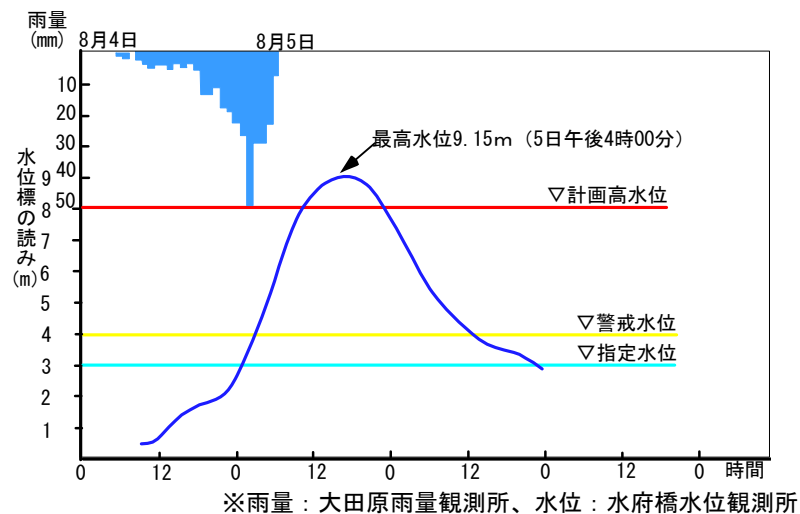


図 4-1 昭和 61 年 8 月洪水の降雨状況と水府橋地点の水位

⑧ 平成 10 年洪水

平成 10 年 8 月 25 日南大東島の南東海上で発生した台風 4 号は、26 日には中心気圧 960 ヘクトパスカルの中型で強い台風となり、30 日には八丈島の南南東約 350km に達した後、9 月 1 日には八丈島の南東に去った。この影響により、本州上の停滞前線の動きが活発化したうえ、南側に斜面が開いている栃木県北部の地形条件、台風の動きが遅かったことなども手伝い、記録的な大雨をもたらした。台風 4 号に刺激された停滞前線により降り始めた雨は、8 月 26 日から 31 日まで栃木県北部を中心に降り続き、流域平均総雨量は 446mm、上流部大沢観測所では総雨量 1,091mm と年間雨量の約 4 分の 3 に達する記録的な大雨となった。大沢観測所の 1 時間あたり雨量は 103mm を記録した。この大雨により那珂川は急激に増水し、水府橋（水戸市）では 8 月 28 日 14 時には最高水位 8.43m（標高 7.42m）を記録した。8 月 29 日には一旦警戒水位を下回ったものの、上流域の強い雨



▲平成 10 年洪水 那珂川の氾濫（水戸市）

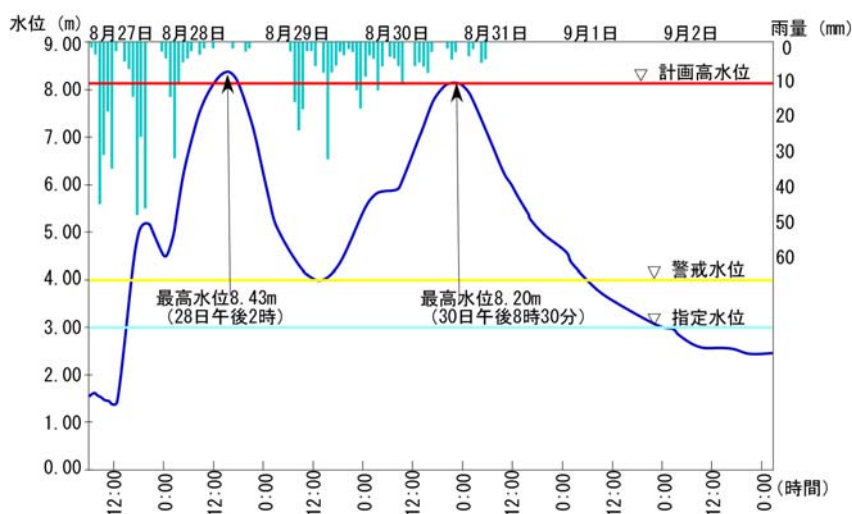
（出典：常陸工事事務所 平成 10 年 8 月那珂川洪水写真集）



▲洪水によって流された寿橋（水戸市）

（出典：常陸工事事務所 平成 10 年 8 月那珂川洪水写真集）

による増水により 30 日には再び上昇して 8.20m となり、計画高水位を 2 度も上回る出水となった。この記録的な大雨により、那珂川沿川の各地では、堤防のない地区や低い土地での浸水が相次ぎ、水戸市を中心に昭和 61 年に次ぐ大水害となった。那珂川沿川の浸水被害は、茨城県で床上浸水 411 戸、床下浸水 410 戸であった。



※雨量：黒田原雨量観測所、水位：水府橋水位観測所

図 4-2 平成 10 年 8 月洪水の概況

4-2 治水事業の沿革

(1) 江戸時代の治水事業

水害を未然に防ぐ治水土木事業は、水戸藩では寛永年間（1624-1644）から堤防工事を郡奉行・代官の任務とした。河川工事は川除普請と呼ばれたが、大規模な施工は行われていない。那珂川の工事さえ、護岸工事が格別に施された形跡はみられない（「水戸市史」）。それに比べ利水工事は江戸時代より盛んに行われている。千波湖の水を利用した備前堀や江堰や溜池が多くつくられている。那珂川の木場堰、久慈川の辰之口堰、岩崎堰は三大江堰といわれる。その他水道や新田開発のための江堰や水路、運河等の工事が行われている。

(2) 治水事業の変遷

那珂川は古くから洪水を頻発し流域に被害をもたらしてきたが、昭和初期までは治水事業としてはほとんど見るべきものがなく、ひとたび洪水に見舞われると濁流となって流域に氾濫する状態であった。

① 那珂川本川

昭和 13 年洪水を契機として、昭和 16 年度に那珂川の改修計画が国の直轄事業として樹立され、那珂川の治水事業がスタートした。昭和 17 年にはこの計画にもとづいて河口域の高水流下断面の増大のための拡張工事を開始し昭和 18 年度まで行ったが、第 2 次世界大戦の影響で本格的な工事には至らず、昭和 20 年度をもって工事を打ち切った。

昭和 21 年～25 年には大宮町小場地先の掘削築堤工事、昭和 23 年～25 年度には水戸市三の丸築堤工事および細谷掘削築堤工事を、また昭和 26～29 年度にはひたちなか市枝川町地先の水衝部の護岸工事を、昭和 28 年～38 年度には那珂町地先築堤工事および水戸市飯富地先の掘削築堤工事を概成した。

昭町 36 年度に開始した常北町上泉地先の築堤工事は、その後いったん中断し、昭和 59 年度に再開した。

昭和 42 年からは下流部の工事に主眼を置き、千歳橋を中心として左岸水戸市国田地区から中河内地区までおよび右岸水戸市渡里地区から根本地区までの掘削築堤工事を暫定断面で開始した。

昭和 42 年度からは、直轄区間の延長に伴う最上流地区の改修として、右岸栃木県那須郡小川町地区の小川上築堤工事、左岸那須郡馬頭町地区の三川又築堤工事を暫定断面で開始した。

新那珂橋下流については、昭和 47 年度に小川下築堤工事を開始し、昭和 51 年度までに権津川合流点付近まで暫定断面で概成した。

② 支川

右支川桜川については、昭和 25 年度に新桜川の開削、本川との合流点の引き下げ、本川からの逆流の緩和のための新桜川掘削築堤工事を開始し、昭和 30 年度には、捷水

路開削・築堤工事等を概成、その後これに付随する護岸・樋管・橋梁等の関連工事を昭和51年度まで継続し概成した。

右支川藤井川については、昭和40年度に藤井掘削築堤工事を開始し、捷水路開削、護岸、橋梁等を継続施工中である。

右支川田野川については、昭和47年度に左岸田野川掘削築堤工事を開始し、昭和58年度までに本川との合流点から上流の2条7号区間を暫定断面で概成した。

那珂川本川及び支川（直轄管理区間）の改修工事の変遷は以下の緒図に示すとおりである。

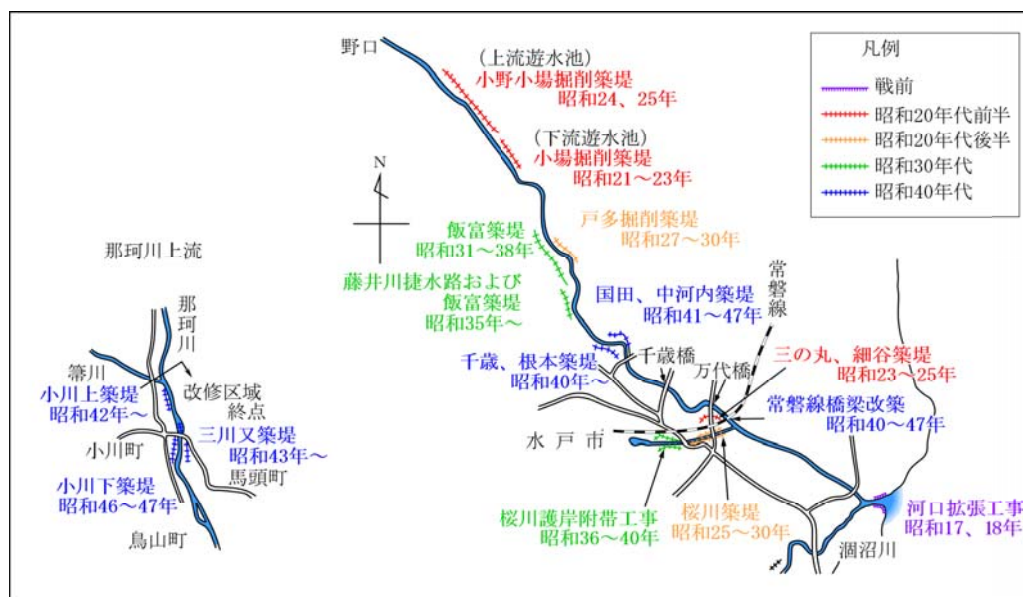


図 4-3 改修工事の変遷

(出典：建設省関東地方建設局 常陸五十年史をもとに作成)

(3) 改修計画の変遷

① 昭和16年改修計画

昭和16年(1941)の改修計画の計画高水流量は、昭和13年(1940)6月、7月洪水を基準地点野口において $4,300\text{m}^3/\text{s}$ (基本高水のピーク流量 $5,200\text{m}^3/\text{s}$ 、上流ダムにて $900\text{m}^3/\text{s}$ 調節)と定め、大場遊水地にて $200\text{m}^3/\text{s}$ 調節し、河口で $4,500\text{m}^3/\text{s}$ とした。

② 昭和28年改修改定計画

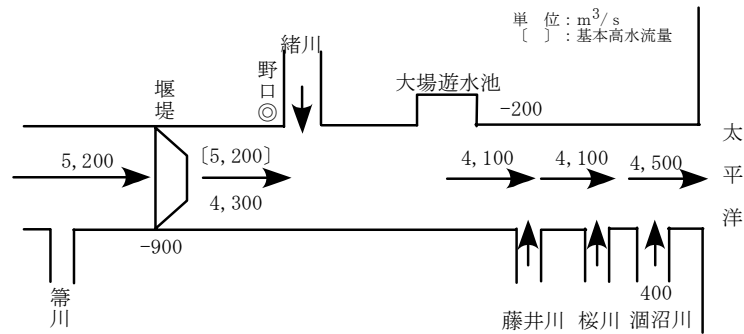
昭和22年(1947)9月洪水を基準に改修計画が見直され、基準地点野口の計画高水流量を $5,200\text{m}^3/\text{s}$ (基本高水のピーク流量 $6,200\text{m}^3/\text{s}$ 、上流ダムにて $1,000\text{m}^3/\text{s}$ 調節)とし、大場遊水地にて $200\text{m}^3/\text{s}$ 調節し、その下流河口までを $5,000\text{m}^3/\text{s}$ と定めた。

③ 昭和41年工事実施基本計画

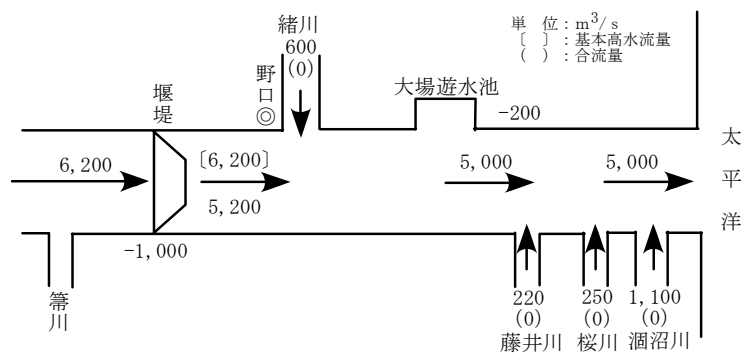
昭和39年制定の河川法により、昭和41年には「工事実施基本計画」を策定したが計画の基本は昭和28年改修改訂計画と同様とした。昭和41年(1966)3月には、直轄区間が栃木県那須郡黒羽町(現大田原市)及び湯津上村(現大田原市)までの 39.0km 延長され、合計 99.5km となった。

④ 平成5年工事实施基本計画改定（現計画）

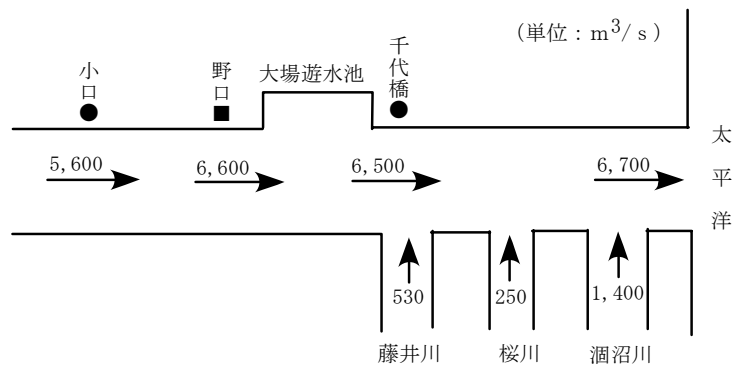
人口増加に伴う市街地の那珂川沿川への拡大など、流域の土地利用が変化の中で、昭和61年8月に水戸市周辺をはじめとして被害が発生したことから、工事实施基本計画の見直しを行い、平成5年4月に現計画を決定した。現計画では、治水安全度を1/100として、基本高水のピーク流量を基準地点野口において8,500m³/sとし、このうちダム及び遊水地により1,900m³/sを調節して河道への配分流量を6,600m³/sとした。



昭和16年改修計画流量配分図



昭和28年改修計画および昭和41年工事实施基本計画流量配分図



平成5年工事实施基本計画改定流量配分図（現計画）

図4-4 那珂川直轄管理区間流量配分の変遷

(4) 近年の治水事業

近年、昭和61年8月の大出水、平成10年8月の豪雨による水害など、戦後最大規模の浸水被害を受け、特に茨城県の商業・工業の重要拠点である水戸市やひたちなか市は大きな被害を受けた。

こうした状況から、那珂川では、「水害に強い川づくり」を重点施策とし、無堤部の早期解消をはじめとした治水施設の整備に力を注いでいる。近年行われた治水事業や現在進められている治水事業を以下に示す。

① 近年行われた主な治水事業

昭和61年8月洪水及び平成10年8月洪水により甚大な被害を受けた那珂川に対し、災害からの復旧や今後の治水対策のため、近年実施した治水事業について図4-5に示す。

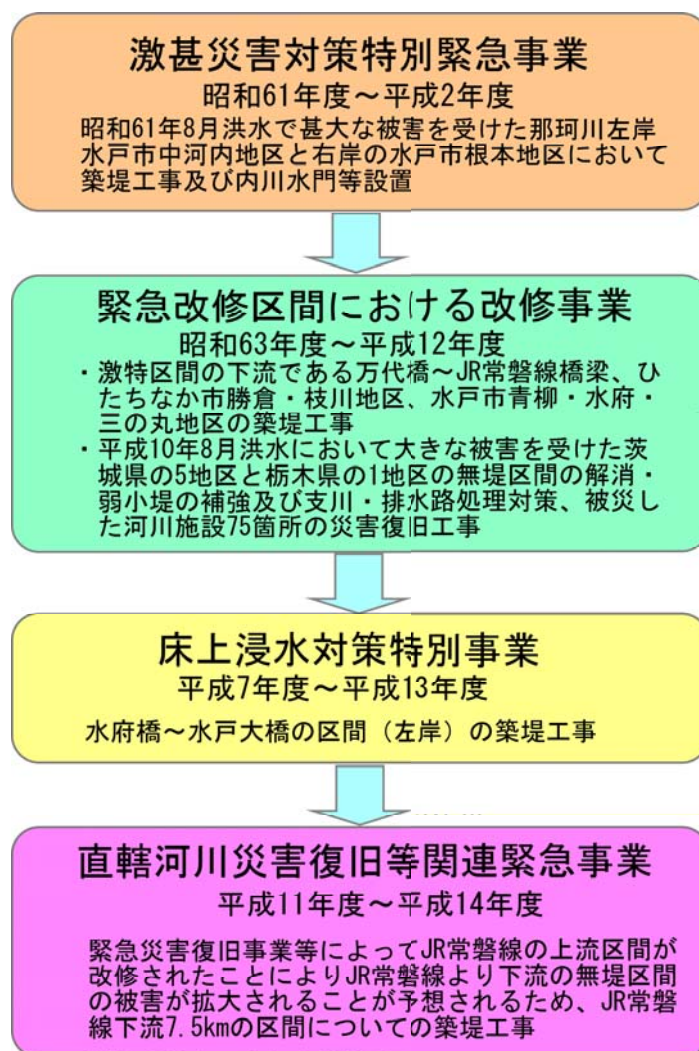


図4-5 近年行われた治水事業の流れ



図 4-6 近年行われた那珂川下流部の治水事業の状況

(出典：常陸河川国道事務所資料)

② 現在進められている治水事業

現在、那珂川水系の直轄管理区間で進めている治水事業は以下のとおりである。

・ 遊水地の整備

那珂川の中流部では、洪水時の最大流量を抑え、洪水氾濫を防ぐことを目的に、平成 11 年度から遊水地の整備を進めている。

現在、御前山遊水地（常陸大宮市下伊勢畑地区）及び大場遊水地（常陸大宮市小場・小野地区）において、用地補償を進めている。



▲ 御前山遊水地（常陸大宮市下伊勢畑地区）

(出典：常陸河川国道事務所資料)

・ 堤防整備

那珂川水系の直轄管理区間では、現在中流部と下流部の 2 地区において洪水からの災害を最小限にするため堤防整備を進めている。

中流部の那須烏山市城東地区では、平成 8 年度の国道 294 号線バイパス開通を契機に、大型スーパーの進出等による大規模な開発が進められているが、この地区は地盤が低く過去に洪水被害が多く発生していることから、堤防整備の早期実現を望まれており、これまでに下流側 550m において築堤を実施し、現在上流側の用地買収を進めている。

下流部では現在ひたちなか市勝倉・金上地区において堤防整備を進めている。既にこの地区の上流区間では堤防整備がなされており、平成 17 年度は用地買収及び築堤工事を進めている。



▲那須烏山市城東地区



▲ひたちなか市勝倉・金上地区

(出典：常陸河川国道事務所資料)

・ 特定構造物改修事業

那珂川に架かる JR 水郡線那珂川橋梁(水戸市)は、明治 30 年に架設された橋梁で、架橋後約 100 年が経過し、同じく那珂川に架かる水府橋(水戸市)は、昭和 7 年に架設された橋梁で架橋後約 70 年が経過しており老朽化が著しい状況である。また、両橋梁はともに橋脚の間隔が狭い上に両橋梁がかかる区間は河川敷の盛土部が張り出していることから、この区間は那珂川最大の河積阻害箇所となっている。

こうした背景から、「特定構造物改築事業」として両橋梁の架け替えとともに、河道の掘削を行い、この区間の流下能力の向上を図り治水安全度を高めることを目的とした事業を平成 11 年度に開始し、現在までに JR 水郡線那珂川橋梁については下部工の工事を着手しており、事業全体としては平成 20 年度完成を目標に進められている。



図 4-7 洪水時の水府橋及び JR 水郡線那珂川橋梁の状況

(出典：常陸河川国道事務所資料)